〔書評と紹介〕

青森県高等学校地方史研究会編『青森県の歴史散歩』

小石川　透

青森県は東西に長く、現在同一の行政区域を形成していながら、東側の南部地方と、西側の津軽地方とで、独自の歴史と文化を築いてきた歴史的な経緯があり、また、本州最北の地として、津軽海峡を挟んだ北海道との関係をはじめ、地域的な特性を多く持っている。

本書『青森県の歴史散歩』は、そうした青森県の歴史的、文化的な特色を、網羅的な記述の中に鮮やかに盛り込み、郷土の歴史を実際に自ら「散歩」したくなる衝動にかられる、知的な興奮を喚起する一冊である。

「青森県の歴史を散歩する」という趣旨からすれば、本書はこれ以上ないガイドブックであり、また、「散歩」はしたいが時間がないという人にとってみれば、郷土の歴史を総合的に網羅した読み応えのある良好の概説書でもある。

編集委員長の福井敏隆氏は、青森県の歴史研究における中心的なメンバーの一人として多大な貢献をしてこられた一方で、教育現場の第一線で活躍されている。その他の編集者・執筆者の方々も、青森県内の各学校や、博物館等で活躍されており、本書が非常に読みやすくありながら、充実した内容となっているのは、教育という現場に携わってこられた経験に裏打ちされた知識が存分に詰め込まれているからだと思われる。

本書の構成は以下のとおりである。

みちのくの小京都―弘前

①城下町弘前　②岩木川上流の史跡　③百沢街道に沿って

④岩木山東麓の史跡

津軽の東根―黒石・平川周辺

①中世の町藤崎・浪岡　②黒石とその周辺　③平川に沿って

津軽新田地帯と西海岸

①木造新田と海岸線を旅する　②十三湖・小泊を訪ねて

③五所川原駅を中心にして

そとが浜―陸奥湾周辺

①夏泊半島を歩く　②青森湊の繁栄　③八甲田の山並み

④そとが浜を行く

下北半島

①半島の起点むつ市　②下北丘陵と東通り　③陸奥湾沿岸と西通り

④津軽海峡と北通り

三本木原周辺と十和田湖

①三沢付近　②十和田市を訪ねて　③十和田湖周辺　④七戸付近

⑤野辺地湊

八戸市とその周辺

①三戸から八戸へ　②八戸藩の城下町とその周辺　③五戸の史跡

以下巻末には、「青森県のあゆみ」「地域の概観」といった青森県全域と地域ごとの概説的な通史と説明及び、文化財公開施設の一覧や年表等の資料で構成されている。また、各地域の冒頭部には散歩モデルコース

として、本書で取りあげた寺社や文化財等を巡る複数のルートが紹介されているが、交通手段や移動時間等が細かく記載され、非常に便利なものとなっている。さらに、各地域の特徴的な事柄についてはコラムが配され、その内容は多岐に渡っている。

内容をみれば、まず「みちのくの小京都―弘前」では、弘前藩の城下町であった弘前市の市街地を中心に、弘前城や長勝寺構、新寺構といった史跡等、代表的な文化財や寺社について紹介されている。コラムでは、「弘前で出会う前川國男の建築物」として、平成十七年に生誕百年を迎えた、前川國男設計の建築物群を紹介し、藩政時代から近現代までの重要な建築物を多数残す弘前の魅力を伝えている。

「津軽の東根―黒石・平川周辺」では、執権北条氏から津軽安藤氏までゆかりの深い寺社の残る藤崎町、浪岡北畠氏の居城であった浪岡城跡のある青森市浪岡等の、中世津軽の歴史を辿る。続いて、津軽信英の分知以来の歴史を持ち、平成十七年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された「こみせ」の残る中町の通りなど、城下町的なたたずまいを色濃く残す黒石市の市街地を中心に、黒石周辺について述べられている。

「津軽新田地帯と西海岸」では、亀ヶ岡遺跡（つがる市）、十三湊遺跡（五所川原市）、種里城跡（鰺ヶ沢町）などの国指定の史跡をはじめ、旧平山家住宅（五所川原市）、斜陽館（つがる市）など、先史時代から近現代までの青森県域を代表する重要な文化財が紹介されている。コラムでは、青森県の近現代の産業史上重要な日本唯一のリンゴの古木（つがる市）や、近年青森県の夏祭りの一方の主役として台頭著しい五所川原市の立佞武多等を取り上げている。

「そとが浜―陸奥湾周辺」では、国の特別史跡であり、それまでの縄文時代観を一変させた三内丸山遺跡（青森市）、安藤氏の城館跡とされ、中国宋代の青磁の香炉も出土した尻八館（青森市）、青森県という行政区域の持つ、「南部と津軽」という特色を具現化したかのような藩境塚（平内町）、明治三十五年に起きた八甲田山雪中行軍遭難の死者を葬った幸畑陸軍墓地（青森市）などが紹介されている。コラムでは、「天明の大飢饉と青森町の打ちこわし」の中で、飢饉に際して弘前藩領内で初めて打ちこわしが起きるまでの過程と、天明飢饉の民衆への影響について詳しく述べられており、「青森ねぶた祭」と併せて、青森民衆のたくましさを活写している。

「下北半島」では、日本三大霊場の一つ恐山等の、人々の信仰と下北独自の伝統芸能、そして旧斗南藩史跡や旧海軍大湊要港部水源地堰堤といった、近世から近代にかけて下北半島が担った歴史的な役割が述べられている。コラムには、祭りと芸能、海運、遺跡、原子力開発、天然記念物、温泉、蝦夷錦、来訪者といった、本州最北端にあり、三方を海に囲まれ、独自の社会と文化を築いてきた下北半島の現在に至るまでの特色についてそれぞれ取りあげており、なかでも恐山信仰については、全国的に信仰の広がりをもつ要因と、その発展経過が端的にまとめられている。

「三本木原周辺と十和田湖」では、基地の町として知られる三沢市、新渡戸三代の三本木原開拓と町割によって現在の礎が築かれた十和田市、北東北を代表する観光地である十和田湖、中世以来の馬産地であり、七戸城跡をはじめ南部氏との関係も深い七戸町、盛岡藩の輸出港として発

展した野辺地町等について紹介されている。三本木原開拓についてのコラム「三本木原開拓と新渡戸3代」「幕末の計画都市―人と街」は、幕末の一大事業であった開拓事業を、新渡戸氏の事跡とその歴史的な経緯について詳述している。

「八戸市とその周辺」では、三戸南部氏の本拠のあった、聖寿寺館跡（南部町）、三戸城跡（三戸町）、根城南部氏の遠野移封迄の本拠であり続けた根城跡（八戸市）等の中世以来の南部氏の北奥世界における伸長を物語る史跡と、南部氏からの崇敬を受け続けた櫛引八幡宮をはじめとする寺社や、是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚等の先史時代の遺跡について紹介する。コラムでは、「泉山の登拝行事」「八戸三社大祭」「えんぶり」といった伝統的な民俗行事や民俗芸能について述べられており、厳しい自然風土の中で暮らす地域民衆が、豊作を祈ることで培ってきた豊かな精神世界を伝えている。

「青森県のあゆみ」「地域の概観」では、本文中で各個に述べられた事柄が有機的につながって青森県域の歴史に組み込まれており、現代にいたるまでの全体的な通史として併せて読んでおきたい。

巻末の「青森県のあゆみ」に、「工業化が近代化を図る指針であるという視点でみれば、青森県はまさしく後進県であった。」という記述があるが、産業や経済の分野から見た「後進県」である青森県像は、現在に至っても、けして解消されてはおらず、むしろ最近の景気の動向を通じて、より一層の「後進県」イメージが付与された観すらある。

しかし、本書の内容の豊富さ詳細さは、「後進県」たる青森県の、独自で多彩な歴史と、今なお住民の生活の中に生き続けている文化を余すことなく伝え、経済や産業分野からの視点を超越した魅力を読者に示している。

青森県外からの来訪者にとっては、本書で示された青森県の姿は、その歴史的な特異性によって魅力に溢れたものとなるだろうし、青森県に暮らす人々にとっては、郷土の歴史への関心を喚起し、さらには「後進県」である郷土への誇りと愛着を生むことにもつながるのではないだろうか。そしてそれこそが、現在教育の現場で活躍中である本書の編集・執筆者の方々の目指したところだと思う。

本書内で紹介されている、弘前市出身である石坂洋次郎の、「物は乏しいが空は青く雪は白く、林檎は赤く、女達は美しい国、それが津軽だ。私の日はそこで過され、私の夢はそこで育まれた。」という言葉と、「青森県のあゆみ」の末尾にある「厳しい財政状況の下、企業誘致や観光開発など課題は多いが、きれいな水と空気、おいしい食材に恵まれた青森県は、今もさらなる飛躍を目指している。」という言葉は、ともに乏しさや貧しさと、それゆえにこそ存在する郷土の自然をはじめとした美しさ豊かさとを対比させている。どちらも、郷土の持つ後進性を強く認識しながらも、その状況に暗い視線を投げかけるのではなく、その状況だからこそ生み出されるものに視線を向けている。それは、石坂言うところの「夢」であり、将来への希望を示しているのではないだろうか。そしてそうした「夢」を、現在教育を受けている若者たちが抱き育むことができてこそ、青森県の「さらなる飛躍」へとつながっていくのだろう。

最後に、本書で述べられた青森県全域に及ぶ歴史的な事項について一つ一つ検証していくことは筆者の能力を超えており、大まかな内容の紹

介と、一方的な感想にとどまってしまったことをお詫び申し上げる。

（Ｂ６判、三三六頁、山川出版社、二〇〇七年、価格本体一二〇〇円）

（こいしかわ・とおる　弘前市教育委員会文化財保護課主事）